恋姫†コック

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫†コック

【Ｎコード】
Ｎ３６２８ＢＡ

【作者名】
尾時山

【あらすじ】
「いらっしゃい。飯？何を食いたいんだよ？」
恋姫無双の世界に迷い込んだ、高校生のコックが料理で生き抜くバカ作品。

始まりの巻　～バナナミルクは甘い誘惑～

◆◇◆◇◆◇

「はぁ……。親父も人使いが荒いよなぁ……」

学ランに袖を通しながら、エプロンを身につける少年。大きな厨房で、ガスコンロに置いたフライパンに火をかけた。

白く輝く鶏の卵を片手で割り、牛乳と一緒にボールに入れ、菜箸で混ぜた。後ろから若い男が、それが気に食わなかったらしく、文句を言った。

「お前、ここフレンチレストランなんやから、泡立て機使えや」

「泡立て機だとホイップになっちゃうだろうが！それよりも後ろの蜂蜜取ってよ」

仕方なく蜂蜜を取ってやる。蜂蜜を受け取った少年は、ボールにそれを出し、そのあとにグラニュー糖を入れた。

食パンをどぼんと漬け、良く熱されたフライパンにバターを落とす。菜箸でバターを万遍なく広げ、ベチャベチャになった食パンをフライパンに投入、焼きはじめる。

一般的なフレンチトーストだ。残りの汁を全部入れ、フライ返しでひょいっと返し、焦げ目が付いたのを確認すると、皿の用意をし始めた。

脇に、飾り付けでミントとチョコ、キャンディを置き、メインのトーストを乗せると、冷凍庫から出したバニラアイスをまるごと一個乗せ、オレンジソースをかけ、完成。厨房からそれを持って出ると、綺麗なテーブルクロスを引いた高級そうな机が所々並ぶ――所謂店内に、注文した、子供連れの家族の方へ行った。

「お待たせ致しました、フレンチトーストとオレンジソースをかけたバニラアイス、ミントとチョコを添えて、でございます」

「わぁっ、美味しそう！！」

子供――小さな男の子が、少年の方を見た。少年は男の子の目線と同じ高さになるようにしゃがみ、ポケットから、ビスケットを差し出した。

「お兄ちゃんから、ボクへ」

「ありがとう！！」

あまりにも可愛いので、男の子を撫でた。フォークを持った男の子がトーストをアイスと一緒に食べる。甘い世界が口に広がり、笑顔が大きくなった。

「美味しい～！」

「よかった！よし、お兄ちゃんがもっとサービスしちゃおう！」

「本当！？じゃあ、ママとパパにも、美味しいもの作ってあげて！」

「うん。では奥様、旦那様。今から、料理が来ますので、何か疑問がございましたら、持ってきた者にお聞きくださいませ」

どうせフレンチだけだがな、と少年は心でぼやいた。フレンチを食すのは悪いことではない。が、それだけでは飽きてしまう。親の仕事上、仕方のないことだが。

「あ、そういや買い物行ってねぇ」

自宅の食材が無いことに気付いた。店はどうにかなる。買い物の方が優先だ。

少年はエプロンを脱ぎ、店を出て、スーパーまで自転車を漕いだ。

「あったぜ、今日の最終お買い得商品、『十勝のモ～さん元気牛乳』１Ｌ２本で１２０円！６本は買ってや――」

店のカゴに、お買い得商品を詰めながら回る。牛乳のコーナーに着くと、牛乳をそのまま持ち逃げしようとする人間がいた。

「おいアンタ、何してんだ」

首根っこを掴む。顔を覗き込むと、目付きが悪く、歯がボロボロの男であった。

「アンタ、モ～さんの元気を金払わず貰うつもりじゃねえだろうな？」

「なんだよお前！！」

「いいから聞け。そんなことしたらモ～さんは泣くぞ。いいか。モ～さんの元気が欲しいなら、これで貰いな」

１２０円を財布から出して渡した。男は金を貰うと、礼も言わずにさっさとレジに行ってしまった。

「モ～さん、あいつに買わせてよかったのだろうか」

今更ではあるが、何か心配だ。レジに向かうと、その心配が現実になっていた。

レジの店員を襲い、金を要求していた。少年はカゴを置き、顔面にドロップキックをお見舞いしてやった。

「モ～さんが泣いてるぜ！！」

「ちくしょお……。てめえ、邪魔くせぇんだよ……」

懐からナイフを出した。少年はそれに憤慨し、ナイフを出した手を掴み、肘で腹を撃ちながら投げた。

「料理に使えるもんを凶器にすんじゃねえ！牛や豚に呪われるぞ！！」

ゲームで見たものをそのままやってみたが、上手くいったようだ。男は完全に延びていて、レジカウンターの台に突っ伏していた。

「モ～さんを眼眩（めくら）ましに使うなんざ、ふてえ奴だな！！」

カゴを持ち直し、レジに向かって会計を済ますと、自転車でレストランではなく自宅へと向かった。

「ただいま、って誰もいるわけないか」

父はまだ仕事だ。母も別れてしまったために、この家にいるわけがない。

冷蔵庫に、買った物を綺麗に入れ、小腹が空いたので、バナナと牛乳、バニラエッセンスを使い、簡単なバナナミルクを作って飲んだ。そのまま二階に上がり、自分の部屋に入ると、買っておいた濡れ煎餅を脇に、料理雑誌を読み始める。

「美味しいエビチャーハンねぇ……。油をそんなに使わないで焼く、か」

フレンチ以外にも、中華や和食なども作れる。というか、今はそれらの方が上手い。

「オイスターソースの量、多くないか？もっと減らして、香づけした方がいいような……」

舌の感覚が冴えている。伊達に鍛えてはいない。

「よし、実際に作ってみっか」

雑誌とバナナミルクを手に、ドアを開けた。

しかし、目の前に広がったのは、自分の家の廊下ではなく、宮殿の中の様な、豪華な作りの通路であった。

「……。夢でも見てるんかな？」

ドアを閉め、考える。ここは、自分の家だったはずだ。間違いは無い。

もう一回ドアを開ける。目の前には、長い桃色の髪をした少女、綺麗な黒のポニーテールの少女が立っていた。

静寂の空気が漂う。それを先に破ったのは、少年だった。

「……あのー、どちらさまでしょうか？」

「……曲者か！！」

「あっ、えっ、へぇっ！？」

黒のポニーテールの少女が声を張り上げた。桃色の髪の子はおどおどしながら、少年に声をかけた。

「一体、どこから出て……」

「あ、あの、後ろのドアから……」

ドアノブを回し、開く。見間違えるはずのない自室。

「どうなってんだよおっ！？」

「姉上、その者に触れては――」

ぞろぞろと大勢の人間が来た。少年は自室に逃げ込み、バナナミルクをテーブルに置き、深呼吸しながら座った。

「何かの間違い何かの間違い……。ここは俺ん家、ここは俺ん家……」

「わぁー、面白そうな物がいっぱいー！！」

「……え？」

一人で逃げ込んだと思ったら、桃色の髪の子が、ちゃっかりついてきていた。

「ん～、これは？『美味しいエビチャーハンの作り方』……」

「あ、あの、お姉さん？なんでついて来たんですか？」

「へ？だって、面白そうだったから」

マヌケ過ぎる。少年は呆れた。

「あの、ここはどこなんですか？」

「ここは私達、蜀軍の、成都のお城だよ」

蜀？成都？三国志か。一人で突っ込みながら、少年は更に聞いた。

「お名前は……」

「私？名は劉備、字は玄徳！君は？」

劉玄徳。蜀の君主か。男のはずだが、目の前にいるのは、完全に女性。何が起こっているのかは解らないが、名前を聞いた以上、答えない訳にはいかない。

「新城（あらき）　魁（かい）……」

「字が魁？」

「いえ、姓は新城、名は魁です」

「へえー」

ゴンゴンと乱暴にドアを叩く音。劉備は「大丈夫だよー」と声をかけた。

「面白そうな飲み物だね！飲んでいいかな？」

「ただのバナナミルクですけど、どうぞ」

飲みかけのバナナミルク。劉備が口にすると同時、ドアが思い切り開かれ、先程のポニーテールの子が、へそ出しのボーイッシュな小さい子を連れ、魁を睨みつけた。

「お姉ちゃん、なにしてるのだ？」
「あっまぁ～い！！なにこれ！？スッゴく美味しい！！鈴々ちゃんも飲む？」

間接キス、とまで考える余裕がない。首に長刀を突き付けられている以上、何もできない。

「俺、敵でも何でもなくて、ここの住民なんですけど」
「ここは成都の城。このような所に、貴様の様な無礼者が住めるはず無い」
「俺が住んでたのは！！東京のただの一軒家だっつぅの！！城なんて知らねぇよ！！コスプレ趣味のあるお前らなんざ知るかよ！！」
「東京？こすぷれ？訳の解らん――」
「本当なのだ！甘いのだ！」
「愛紗ちゃんもどう？」
「桃香様……。毒物なのかもしれませんよ？」
「自分が飲んでたモンに毒なんて入れるかよ！」

魁は怒った。長刀の刃の付け根を踏んで、右手でそれを持つ手を掴み、手刀で肘を打ち、一瞬の痛みで長刀を落とさせた。
すかさず右足に足払いを仕掛け、後ろにこけさせる。鮮やかなＣＱＣ。愛紗と呼ばれた女の子は、そのまま気絶した。

「うん、今のは愛紗がいけないのだ。ところでお前、どこから来たのだ？」
「俺はこの部屋の住民なんだよ。本当はこの扉を開けたら、俺ん家の木の板張りの廊下に出んのによ……」

愛紗を自分のベッドに寝かせると、鈴々という女の子に答えた。

「玄徳さんの話から推測すれば、ここは蜀。鳳統を失い劉彰を倒し、蜀を手に入れた。そんで、長刀をもってたこいつが、美髯公の関雲長だとすれば、アンタは”燕人”、張翼徳か？」
「劉彰様も、雛里ちゃんも生きてるけど……」
「その通りなのだ！鈴々の名は張飛、字は翼徳なのだ！！」

鈴々とか、桃香とか、訳が解らん名が出てくる。魁の頭がこんがらがりそうだった。

「その、玄徳さんの”桃香”、とか、翼徳さんの”鈴々”、とか、何なんだ？」
「真名は、心を許した相手にしか呼ばせちゃいけないんだよ。私の真名は桃香。魁くんは、私を真名で呼んでいいよ」
「鈴々の真名は鈴々なのだ！！美味しい物貰ったし、真名で呼んでもいいのだ！」
「は、はぁ……」

だんだん、理解が出来てきたのか、魁は返事をした。

女性の三国志。それも、史実とは全く違う。

自分がここに迷い込んだのを、魁は後悔していいのか、悪いのか、複雑な気持ちになった。

一品目　プリプリ甘海老チャーハン（前書き）

↓主人公データ

名前
・新城（あらき）　魁（かい）

身長
・１７７ｃｍ

体重
・６２ｋｇ

髪型
・黒の瞼と首の少し後ろにかかるぐらいのショート、サラサラ（ここ重要ｗ）

アイカラー
・水色

年齢
・８／１０（ぶどう）産まれの１８歳

趣味・特技
・ＣＱＣなどのミリタリーアクション
・料理

好きな物
・牛（牛乳好きだから）
・銃

嫌いな物
・包丁を使って危ないことするやつ

能力（？）
・絶対味覚の持ち主

備考
・彼が２歳の時に母が浮気し両親は離婚。父に引き取られるが、父

の料理＝ビジネス思考が嫌いな為、父が嫌い。
・幼いころから舌がよい。味覚は人より何倍も優れている。
・ＭＧＳのオタクである。そこから軍事にはまり出した。
・専門はフレンチだが、イタリアンや和洋中など、ジャンル関係なしに料理が得意。
・牛や豚などから栄養を貰っている存在でありながら、人を切る為に包丁やナイフを使うことを嫌う。

一品目　プリプリ甘海老チャーハン

◆◇◆◇◆◇

「……ん？」

愛紗が眼を覚ますと、先程魁に倒された部屋の天井がまず見えた。

「あ、起きた」

魁が顔を覗き込む。自慢の青龍偃月刀は無くなっていた。素早く起き上がり、後ろの、魁が趣味で買ったガスガンのＳＯＣＯＭ　Ｍｋ．２３を、バレルを持ち、打撃武器の様にした。

「やめとけ。殴り掛かって来たら、今度は本気で怒るぜ」

「……」

「はぁ……。雲長さん。桃香さんに言い付けるぞ？『友人に手を出した』って」

「桃香様を軽々しく呼ぶ……あれ？友人？」

「さっきなった。鈴々ちゃんともなったよ。いいから、銃を下ろしてくれないか？てか、その持ち方だと自爆するぞ？」

セイフティは外してある。しかもこのガスガン、ゴム弾を撃てるように改造してある。また、実銃と同じガスを使用している為、暴発する恐れもある。

「指が焼肉になるぞ。銃を渡せ」

「……」

また攻撃されるのではないか、と警戒する。しかし魁は反撃しかしていない。

「あのな、さっきのも、アンタが攻撃しようとしてたから、自己防衛に出ただけなんだぜ？」

「……確かに、私に非があった。しかし……」

「ああ、めんどくせぇ。俺はアンタの敵じゃない。言っている意味が解るか？危害を加えるつもりはない。だから、銃を渡せ」

これでも渡さなかったら、ＣＱＣで銃を取るつもりでいたが、嫌な顔をしながら銃を返してくれた。魁はセイフティをかけ、ベッドの上に優しく置いた。

「雲長さん。この件は水に流して、宮殿の案内をしてくれないか？」

「不審者を案内して――」

「あんたの君主が、雲長さんに案内してもらえって言ってたんだ。君主の言うことを聞かないのかよ？」

言い方は悪者そのものだが、それでも効果的ではあるだろう。愛紗はしぶしぶ了承し、後ろについて来いと言ったので、それに従った。

「所で、私の武器は？」

「ああ、鈴々ちゃんが持って行ったぞ」

「鈴々とも親しくなったのか、なんて奴……」

「なんで俺、こんなに嫌われてんの？」

はぁ、とため息を付きながら、魁は歩いた。

「ここは庶務所。普段はここに、大抵の人間がいる。何かあったら、

ここを訪ねるといい」
「へえ。雲長さんもここに？」
「私は、時によっては兵社にいたりもする。ほら、そこにあるだろう？」

窓から覗くと、大勢の人間が、武術の鍛練をしている。槍や、弓や、馬術など、様々である。

「この通りを突き当たると厠へ行ける」
「まさか、水洗じゃないよな？」
「水洗？なんだそれ？」

やはり。トイレは水洗にしてやろう。魁自身、工学などの知識は中々あるつもりだ。

「ここの階段を上がると、姉上の桃香様のお部屋があったり、私達の寝所があったりする。下ると、大食堂と、厨房がある」
「厨房かあ。火は、薪からか？」
「それ以外に何を使うんだ？」
「俺はガスっていう魔法の気体を使って火をつけていた」
「ガス……」
「ここだと、東シナ海、つまりは呉の国から取れるはずだ。精製は面倒だけど」
「色々な事を知っているな」
「俺は雲長さん達より遥か未来の人間なんだよね。生活は時代と共に変わるんだよ」
「なるほど……。ああ、そういえば、名前を聞いていなかったな」
「性は新城、名が魁だ。覚えておくれよ、美髯公……。いや、髪が長くて綺麗だから、美髪公って呼んだ方がいいかい？」
「き、綺麗……」

照れて顔を赤くしてしまった。魁は素直に、この髪の艶やキューティクルを素晴らしいと思った。自身も男としては多少長めで、しかもサラサラである。しかし、愛紗には流石に負けてしまうだろう。

「ここに男はいないのか？」
「武将としてはいない」
「へえ。珍しい」

髭面の強面な男が広大な野原を駆け抜けているシーンが自然に眼に浮かぶ。が、この世界にそんなことは無いようだ。

「雲長さん。腹は減ってないか？」
「そういえば、昼餉がまだだった……」
「よっしゃ。特別に、俺が飯作ってやる」

厨房に入りたいがだけだが、さっきのエビチャーハンを作るのにも調度いい。毒を入れないかと眼付けで愛紗はついて来たが、魁は毒なんて持ってないし、まさか厨房に毒があるはずはない。

慣れた手つきで、炊いてあった米を小さな器に移し替え、卵と一緒に混ぜる。

「醤油は……ある？」
「ああ、これか？」

赤い瓶詰の液体。少しだけ器に入れ、また混ぜた。
中華鍋を出し、油を少しだけ引き、火にかける。火は愛紗が付けてくれた。

甘海老の殻を向き、蒸し器を持ち出して蒸している間に、中華鍋に先程のごはんを投入、ニンニクを薄く切って入れた後に炒め始めた。

「手際がいいな……」
「料理人だからな」

適当に野菜を細かく切ってまた炒め、少し焦げ目が付いたのを見ると、皿を勝手に出し、置いてあった桃の葉を飾って、メインのチャーハンを入れた。

蒸し海老も調度良く出来上がり、綺麗なごはんの丘に滑らせながら入れ、蓮華をつけて愛紗に差し出す。わずか15分の出来事。その早業に愛紗は感心した。

「召し上がれ」
「い、いただきます」

毒はない。アッツアツのチャーハンを一口。

口に広がる海老のうま味と、卵を絡めたごはんの甘味。醤油で塩味を出して、ちょうどいい――、いや、美味の料理になっている。

「美味しい、だと……？」
「美味かったか。そりゃよかった……って、なんで泣いてんだ」

あまりの美味さに、感動し始めた。蓮華に涙が落ち、キラリと光る。

「この世には、こんなに美味しい物があったのですね……」

「なんで敬語？」

ウルウルと眼を輝かせ、魁を見た。完全に胃袋が制圧されている。

「この愛紗のこれまでのご無礼、お許しください、魁様」

「え？ああ……、へ？雲長さん？」

「字ではなく、真名で呼んでください。貴方の味に感服しました」

誰だコイツ。人が変わっている。

「あれー、魁くん。お料理？」

「ああ。食べさせたら、愛紗さんが泣きはじめちゃって」

「あららぁ」

一人眼を閉じ、未だに味を忘れられぬ愛紗を脇に、桃香がチャーハンを口にした。

「……うん。愛紗ちゃんの気持ちは、よぉくわかった」

ニッコリと桃香が笑う。魁の手を握り、こう言った。

「君は、味の神様だね！」

「……はあ？」

確かに、自分の味覚は、普通の人よりかはいい。だが、いくらなんでも神は無いだろう。

「愛紗さんも、桃香さんも、チャーハン食ったくらいで――」

「いやはや、こんなに美味しいお料理を食べたのは、生まれて初めてだよ」

「魁様……、貴方の料理、私の胃袋を見事に討ち取りました」
「愛紗さんの言ってる意味が解らんのだが……。気に入ってくれたんなら嬉しいよ」
「気に入った？いやはや、これはもう、ご褒美だよ」

そこまで言うのは少しばかり大袈裟な気もする。魁は頭をポリポリと掻いた。

「なら、デザートも作ってやるよ。俺の料理を褒めてくれた礼だ」

少し照れながら魁が言った。と、言っても、フルーツや卵しかないので、あまり大層な物は作れない。

「牛乳はあるか？」
「うん、今朝の搾りたてなら」

生乳か。なら、尚更都合がいい。

「洋食系のを作ってやるよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3628ba/

恋姫†コック

2012年1月9日23時52分発行